

## 随 想 誤 解 と 例 題

第 3 研修部 金 沢 義 夫

同音異義による誤解は多い。「世話になんない」という挨拶も、方言のアクセントで聞けば心あたたまる。けれど、その習慣のない人が耳にすれば不愉快な思いをする。(あなたの世話にはならないよ と聞えるから)

言葉は自分の生活範囲の習慣で翻訳される。

「はえたたきを持って来い」といわれたとき、煙草をすう人は灰皿を、煙草をやらない人は蠅叩きをもっていく。あるいは会話中に不注意にも専門語、英語、略称を混ぜ込んでしまうのも生活習慣のせいである。

人は、自分の生活に使っている言葉でものを理解する。だから、どうにもうまく表わせない状態が、自分に合うような言葉で表現されたり、リズムカルに調整されたものにあうと、いたくその言葉に惚れ込んでしまう。「愛は輪に似ている。輪には終りが無い」などの格言的なものが、彼の生活の支えになっても不思議はない。

さらに人は、会話による言葉の位置、すなわち言葉を思考の筋道に起用するようになり、生活のバランスを楽しむようになる。

かくして話者Xと話者YがPなることで話し合ったとき、Xから発信したPが、YにはP'として頭脳に受信され、今度はYからP'を発信したのに、XはXなりの生活から見做しをこころみてP''に直したとする。すると

P→P'

P''←P'

P''→Q

Q'←Q

のような過程を展開することになる。話者の数がふえるほど生活が多く参加してきて、終局には、はじめのPとは大分ちがった話題になっていよう……が、そこにある「生活のバランス効果」は貴重である。

ところが、ここに誤解を招く隙間がある。

楽しそうな会話の裏では、異状な、未経験な、特別な反応も発生している。だから表面は流れに沿いながらもいつかは、いつかは自説を述べるチャンスがある。と間合いをうかがっているものだ。そのうちに終わってしまう。……誤解はその後に発生する。

たとえば

- ・ 奴は天才だ
- ・ 天才というものは限られた人間だ
- ・ 普通ではない
- ・ たしかに奴は、普通ではない
- ・ ……奴には変なところがある
- ・ 渋柿たべても平気だ

- ・ 奴は、変な奴だ
- ・ 変な奴だ
- ・ 天才ではない

のように、結論では別物になる手段がある。

「噂」もこの類のものだ。戦国時代にはこの手段を利用して敵の背後攪乱に成功している。

つまり、誤解はある時点での確認をおこたったところに寄生している。

確認できない状況下であればなおのこと流言に悩まされることであろう。

問題を前にした生徒の脳裏は、まさに確認しようもない状況下の混迷に似ている。

これを助けるには事前の例題演習しかない。例題は誤答の発生をけん制する。

従って例題をえらぶ場合は、誤答の作意的な寄生状態を検討していなければ意味がない。

「誤解をとく」ために選んだ例題である限り、誤答は確認のための大切な手続きなのだから――。

「教師は、自分で問題が作れなければ……」ということを知り、生徒を誤解から守るための提示としてもうなずける。

ところが、例題を作成し検討しても「生徒を誤解から守る」手段には及ばない場合がある。

M: だから、家庭でつかっている電気は、このような波形で、これを交流という。

N: ……? ……でも、家の電線は波型ではない。N君のような、突然の質問にあえば、大方は二の句がつけられない。

某老人は「わかった!、電気が強いのは、あの高い山から電線のなかをいきおいよく落ちてくるからだ」それを聞いた人は、なるほど、そういう理解の仕方もあるのか、と感心したという。

これは誤解だろうか、そういう風に考えてみると一切が解きほぐれるから、そういう風に考えただけなのである。すなわち、多くはないが、理解には一般とは異なるものもある。――いや、理解の仕方は様々なのかも知れない。

よって、説明のときはよくうなずいた生徒でも、即座の小テストの結果が悪いことがある。彼なりの考え方や説明が、妙に同調していたのだから。

この妙な同調を修正するにはたとえ話しかない。本質を把ませるための別法である。手続きはあとで工夫するとして、本質を把ませる別法の精選が先きである。